

二〇一一年度中国電子出版・電子図書館に関する 国際セミナー参加報告

リンダ・グローブ（田中アユ子訳）

昨年の八月二九―三〇日に北京の清華大学で、二〇一一年度中国電子出版・電子図書館に関する国際セミナーが開催され、中国国内外から四〇〇人ほどの参加者が集まった。最初の二日間には電子資料の整備、利用、管理のさまざまな面について発表が行われたが、それに続いて大学図書館やCNKI本部への訪問があり、九月一日には北京国際ブックフェアを見学する機会も設けられた。本報告では、今回のセミナーのスポンサーをつとめたCNKIについて論じるとともに、セミナーでの報告内容の一部、中国研究にかかわる電子資料の整備、資料へのアクセスや利用にまつわる問題について論じていきたい。

資料の電子化が学者の研究環境を一変させたことは言うまでもない。清華大学でのセミナー初日に、電子資料を用いて研究を行っている立場からの講演を依頼されていた筆者は、以前の研究環境を振り返るところから話を始めた。当時は、どこに資料があるか突き止め、図書館を訪れるまでに相当な時間を費やしたものである。図書館のリファレンス・コーナーには貴重書の所蔵目録や定期刊行物総合目録などがびっしりと並んでおり、数ある目録のなかから、必要な資料がどこにあるかを見つけるというステップを踏まなければ、研究プロジェクトを始めることさえできなかった。中国の図書館については蔵書・資料目録がほとんどなく、

目録があつたとしても実際に利用できるものは限られていた。研究に使う資料リストを作成し、資料の所在を突き止めたら、国内外の図書館を訪れる研究資金源を探すが次なるステップであつた。今日では主要な図書館の図書目録はネットで閲覧できるし、図書目録の横断検索をするポータルサイトの計画もあちこちで進められてきた。おかげで、探している本や雑誌を国内のどの図書館がもっているかはすぐに分かるし、専門のポータルサイトを使えば、貴重書を探し、その全文を閲覧できるサイトも簡単にみつけられるようになった。しかし、日本（またヨーロッパ諸国のはとんど）における電子化は、セミナー参



「2011年中文数字出版与数字图书馆国际研讨会」

加者の多くが指摘した通り、中国と比べ非常に遅れている。その背景には電子資料を普及させ、売り込むための体制が違ふことや、中国語（および英語）と比べ、日本語や英語以外のヨーロッパ言語の雑誌・書籍を電子化しても市場が限られていることなどがある。日本の場合、さらに状況を複雑にしているのは、多くのデータベース（稀観本・貴重資料などの全文を電子化したものを含む）が政府の補

助金を得て作成されているために、ユーザーに無料でデータベースを公開することが義務づけられていることである。中国の状況はまったく異なっており、さまざまな電子資料が急速に整備されてきている。清華大学で行われたセミナーの主要スポンサーはCNKI（China National Knowledge Infrastructure: CNKI / 中国名は中国知識基礎設施工程）で、世界中の中国研究者に広く利用されている電子資料を提供しているプロジェクトの一つである。セミナー開催中にはCNKIの新しい本部を見学したが、CNKIを運営する同方知網技術有限公司の社長であり、中国学術期刊（光盤版）電子雑誌社の責任者でもある王明亮博士と長く話をする機会もあった。

■CNKIと中国での学術資料の電子化

セミナー参加者は九月一日に北京国際ブックフェアを見学したが、昼食時に王博士はCNKIの成り立ちとその業務について説明してくれた。王氏は山西省太原市出身で、清華大学で物理学の博士号

を取得し、若手教員として同校に残った。CNKIは一九九四年に彼と同僚二人が中国の雑誌に掲載された重要な論文を集め、それをCD-ROMに収録して販売するプロジェクトを立ち上げたことから発展した。現在のCNKIは電子化プロジェクトのためのソフトウェア開発や、電子雑誌・年鑑その他の販売などを行う国有企業数社を巻き込んで発展するまでになっている。働いている人の数はおよそ一〇〇〇人。実際にCNKI本部を訪問したが、本部である新しい建物は北京五環路の外に清華大学が開設した工業団地にあり、二〇一一年四月に移転したばかりのことだった。北京での賃金や生活費の上昇にともない、太原市に「入力処理センター」を設けたり、青島に海外顧客向けの新たなサーバーを設置している。

工業団地にあるCNKI本部は四階建てのビルで、一階に入力処理センターがあり、上の階には事務局、ソフトウェア開発、出版・マーケティング部門などがある。入力処理センターで働く人々以外



同方知網技術有限公司社屋にて

のほとんどは大卒で、技術者やその他の職員は少なくとも修士号をもっており、多くが博士号を有している。国際マーケティング部門のスタッフは今回の国際会議を組織し、外国人参加者に対応する役目を果たした。セミナー参加者は、彼らが技術面で高度の知識とスキルを備え、語学にも秀でていることに感心した。

入力処理センターの見学は短時間でも、非常に勉強になった。CNKIではデータベースにアップロードする前に、すべ

ての資料を入念にチェックして、その正確性や読みやすさを確認している。多くの出版社は電子データを提出しているが、それでもすべての資料を再チェックし、読みやすさや間違いなどを確認している。どの論文も二人のスタッフが独立に入力してチェックし、結果を比較することで食い違いなどが一切ないようにしている。また、データベース上にあるすべての資料のハードコピーを受け取り、問題が生じた場合に修正できるよう五年間は保管している。こうした現場を見学してみても、CNKIの契約サービスが高価な理由に納得がいった。

CNKIデータベースは資料の収録範囲を拡大し、こうした資料を使いやすくする検索ツールを開発してきた。新しい技術の一つとしては統計年鑑の膨大なデータベースを検索する機能があげられる。いまやユーザーはこの年鑑にアクセスし、自分の研究プロジェクトに必要なデータを選択して、そのデータをエクセル方式でダウンロードできるのである。実際に統計データを使う場合、こうした

機能は時間の大幅な節約となる。データを自分で入力し、それが原本と合っているかチェックする手間が省けるからである。

■電子サービスの利用者

セミナーではアジア、ヨーロッパ、北米などの大学図書館員が教育研究のための電子資料利用法について発表を行っていた。世界各国の大学図書館では、図書購入予算のうち電子資料につき込む部分が多くなっており、電子化は図書館だけでなく、教育の場をも変化させている。

学生は携帯情報機器から授業の資料を簡単に入手できて当然と考えるようになっていた。情報や娯楽をインターネット上で探すのに慣れている彼らは、電子資料は無料のものと思っている。しかし、デジタルコンテンツの作成には費用がかかる。商業サイトなら広告スペースを売って、ユーザーに「無料」コンテンツを提供できるが、電子書籍、雑誌データベース、学位論文データベースなどの学術的なコンテンツを扱う場合には、入力処理

やデジタル配布にかかる費用をまかなう方法を採らねばならない。その解決法として編み出されたのが電子資料購読料の徴収であるが、その結果、電子資料の閲覧料金は高騰を続けている。

電子資料購入予算の配分を考える場合、日本の大学図書館のほとんどは日本語と「国際語」である英語での資料やデータベースの提供を最優先している。中国語の電子資料の多くが閲覧できるような体制を整えているのは、日本でも最大規模の国立・私立大学のみであり、資金源の豊富な大学に所属する学生や教員とそうでない大学の人々との間に格差が生じてしまっている。こうした状況に直面しているのは何も日本だけではない。清華大

学のセミナーでは、利用者のほとんどが中国語を母語としている地域（中国、台湾、香港、およびシンガポール）とその他の国々との間で、中国語電子資料へのアクセスに格差があることが明らかになった。

日本の状況に目を向ければ、中国語電子資料へのアクセスには研究機関の間で大きな差がある。現在のところ、電子資料の主な利用者は、研究目的でそうした資料を利用する学者や大学院生である。どの大学でも中国研究を行っている人々の数は限られており、CNKIデータベースのすべてのサービスが利用できる大学や研究機関はほんの一握りである。所属する大学・研究機関が小規模で、中

国語のデータベースの利用契約をむすんでいない場合、研究者はもちろん個人として利用契約をむすぶことはできる。CNKIは雑誌や学位論文データベースの検索サービスについては無料で提供しているが、資料をダウンロードする場合には費用がかかる。現在では、多くの研究者が東方書店の運営するサーバーを利用しており、その都度料金を支払って論文をダウンロードしている。

これまでは中国研究者がCNKIのデータベースの主要顧客であったが、それよりもはるかに数の多い潜在的な利用者として、日本の大学や大学院で学んでいる中国人学生が考えられる。彼らが学んでいる分野は多岐にわたっているので、

姚 毅著

近代中国の 出産と国家・社会

医師・助産士・接生婆 近代中国において医師・助産士がいかにして登場し、伝統的産婆に取って代わっていったのか、そのプロセスを国家・社会・文化との関連を視野に入れたつづき解明する。
A5判 396頁 7350円

後藤秋正著

東西南北の人

杜南の詩と詩語 杜詩を生活者の視点から捉え直した論考と平易な言葉に見えながら一律には扱えない杜南の詩語を考えた文章を取録。
346頁 65円

詩人の視線と聴覚

王維と陸游 王維と陸游をメインテーマとし、両者を繋ぐ中晩唐を中心とした唐代文学にかんする論考との三部構成で編む。
7350円

研文選書

孔祥吉・村田雄二郎著 7140円

清末中国と日本 宮廷・変法・革命 7875円

小林武・佐藤豊著 7875円

清末功利思想と日本 田中比呂志著 6825円

近代中国の政治統合と地域社会 岩間一弘著 7350円

上海近代のホワイトカラー

研文出版

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

中国語を話すすべての学生のニーズに対応しようとする大学は、あらゆる分野の雑誌、学会資料・学位論文データベース、また統計・年鑑資料などを閲覧できる体制を整えていく必要がある。

今回のセミナーで論じられた問題の一つは、各研究機関で中国語の資料を利用する研究者の数が少ないような、中国語圏外の地域においてこうした資料を利用していくにはどうすればよいか、ということであったが、ベルリン州立図書館のマティアス・カウン氏がクロスアジア・プロジェクトについて興味深い発表を行っていた。

■ドイツのクロスアジア・プロジェクト

クロスアジアは東アジアおよび東南アジアに関する電子資料をドイツ全体で利用できるよう進められているプロジェクトで、ベルリン州立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) が運営し、ドイツ研究振興協会 (DFG) が資金提供を行っている (英語版 URL は <http://crossasia.org/en/home/>)。これはドイツ

のどの大学・研究センターに所属する研究者でも利用できるサービスマである。個々の研究者はクロスアジアに登録し、所属研究機関によつて所属していることが証明されれば、すぐに電子資料を利用できるようになる。現在の登録者数は四〇〇〇人程度で、そのうちの約一五〇〇人が実際にこのサービスを利用していているという。クロスアジアというプラットフォームを導入し、ドイツ政府から資金援助を得たことで、CNKIその他の電子資料に興味のある研究者たちは、あちこちの大学や研究センターに少数ずつ点においていても、こうした資料を利用できるようになったわけである。クロスアジア・プロジェクトは、同様の問題(中国／アジア研究者の総数は多いが、各機関に散在していること)を抱えている日本や韓国にとつても有用なモデルになり得る。

天津の友人を訪問した際には、電子資料へのアクセスの問題を解決するもう一つの方法を学ぶこともできた。天津では教育・研究機関が電子資料を利用できる

よう地域ポータルを設けており、加入機関が利用料金を分担して、どの加入機関でも所属している学生や研究者が電子資料を利用できるようにしている。地域ポータルを設立すれば、幾つかの機関が共同で教員や学生に中国語の電子資料利用サービスを提供し、費用も手ごろな範囲に抑えられる可能性がある。

電子資料の重要性は将来もさらに増していくだろう。電子革命のもたらした恩恵のおかげで、必要な資料がどこにあるか特定したり、実際に利用したりするのにかかる時間が大幅に短縮され、遠くの図書館や文書館に向く費用も節約できるようにになった。今後は、どの研究機関にいる研究者でも電子資料が利用できるようにするような方法を模索していくとともに、我々のニーズに添えていくべく、電子資料提供者に対しても十分な経済的インセンティブを与える体制を整えていくことが必要となるだろう。

(上智大学名誉教授)